

会報

安曇人

安曇誕生の系譜を探る会

CONTENTS

- 1 100メートルで3センチの高低差・・・百瀬新治
 2～3 前方後方墳を巡る旅・・・鈴岡潤一
 4～5 山上の古代集落・・・山田真一
 6～7 住吉庄の成立に関わる予想・・・逸見大悟
 8 ホームページをリニューアル・・・平林厚美
 穂高古墳群の整備活動・・・古川幸男

発行責任者 会長 百瀬新治 事務局長 川崎克之
 編集委員長 丸林一孝 企画運営委員長 古川幸男

〒399-7102 安曇野市明科中川手1177-3 ☎090-5779-5058



100メートルで3センチの高低差

会長 百瀬 新治

思いもかけずNHKの看板番組ブラタモリの出演を依頼され、タモリ氏に安曇野を代表する風物へと案内する経験を得た。その番組内で私が伝えたかったことは、現在における安曇野風景の形成に果たした安曇の民衆の働きについてであった。私がタモリ氏を拾ヶ堰に案内した場面でも、難工事を短期間で完成させるに際して、安曇の農民が果たした功労について丁寧に説明したかった。が、番組構成上などの結果として放映されず、せっかくの機会を逃して残念な思いが残っている。

安曇野を代表する用水路の一つである拾ヶ堰は、今から約200年前の江戸時代に安曇の中央部平坦地に向けて開削された大規模用水で、藩命で付近の農民6万人を動員し、冬場の数か月で完成させた。水量の豊富な奈良井川から取水し、梓川を横断通水させて流域10か村において広大な水田造成がされた。扇状地の乏水地帯を貫いて、全長15kmを高低差5mで流すという、精密かつ高度な土木工事の結果であった。

さて、タモリ氏を拾ヶ堰の流れに案内し、全国の皆さ

んに伝えたいと願ったのは『100mで高低差3cmという極めて緩やかな勾配の土製用水路を誰がどんな工法でやったのか?』であった。高い技術を持つ企業がコンクリート製で施工しても、おそらく簡単にはできない難工事だろう。そしてこの難しい工事は『毎日田んぼで汗を流している農民の手』があったからこそ、との回答を説得力のある説明で示したいと思った。

稲作を経験している方はわかると思うが、代掻きで田面を水平にするのは米づくりの基本である。高低差3cm以内程度で稲を育てられるから、水を温かく保ち雑草の繁茂を防ぐことができる。農民が長い間その事に心血を注ぎ、田面をどこまでも平らにする技術は身体に染みついている。その農民が造ったが故に、長距離をゆったりと流れる用水が実現し、200年間維持できたのである。

現在の安曇野を象徴する豊かな田園風景は、この地の民衆の技と汗でできている。安曇の歴史を語る根底に、名も無き民衆が重要な役割を果たしていることをしっかりと伝え広めたい。

前方後方墳を訪ねる旅

鈴岡潤一

はじめに

古代史においては、新たに出土した「モノ」をどう読み解くのか、日々に、難しい問題に直面しているであろう。昨年は、松本城の西北方面に新たな前方後方墳を確認という論文が発表された。弘法山古墳についても、冬至の日の出に注目して、大地に暦を作るポイントとなる地点、という解釈をご教示いただいた研究者もいる。こうした主張をどのように受け止めるのだろうか。また、継続している学術調査も目が離せない。

1) 通説における古墳論

なにはともあれ、その「前方後方墳」という形がなにを意味するのか、解りたいという想いがある。

通説では、前方後円墳でなければ古墳でないかのような論法がまかり通っている。しかし、各地に古墳群があるけれども、「古墳時代」の初期の古墳が前方後方墳であるという古墳群が濃尾平野、信濃から関東にかけて、たくさんある。通説の説くところとの違いの大きさに戸惑うばかりであるが、実は通説は、墓制の実態の総括になってはなくて、頭でっかちの妄想に過ぎないのではないか、などと思ってしまう。

通説の代表として、試みに寺沢薫著『王権誕生』（講談社学術文庫・日本の歴史02）の前方後方墳論を取り出してみる。

[前方後方墳の成立と東国への波及も過大評価してはならない。確かに東国の前方後方墳は濃尾平野を波及の震源としている可能性がある。しかし、周溝の一片の中央が切れて通路を持つ方形周溝墓から発達した前方後方という形自体は、どこでも生まれ得る墳丘形態で、西日本でも狗奴國の動向とは全く無関係に誕生している。

しかも、前方後円墳が円丘への通路をただ発達させたのではなく、思想的オリジナリティーと東アジア的契機によって誕生したのに対して、前方後方墳の成立にアイデンティティーがあるとは思えない。私は前方後方墳は前方後円墳の影響で生まれたものだと思っている。]（寺沢 p. 286）

寺沢薫のここでの議論は、前方後円墳と前方後方墳の比較である。それもそれぞれに共通する「前方」部の比較の試みである。

前方後方墳については、「濃尾平野を波及の震源としている可能性がある」としつつも、「どこでも生まれ得る形態」なので「アイデンティティーがあるとは思えない」としている。簡潔には、前方後方墳の「前方部」は、通路だとしている。翻って、前方後円墳については、「思想的オリジナリティーと東アジア的契機によって誕生した」としている。こちらには思想性があるのだとか。

そうおっしゃいますが、しかし、日本海側の多くの遺

跡では、この地特有の「四隅突出型墳丘墓」とともに前方後方形墳丘墓が存在する。これは弥生時代とされる時代の遺跡である。寺沢薫は、この現実を見ようとしていないようであるが。

2) 「前方後方墳」を探す

1 出雲地方にて

「NHK松本文化センター講座」や「邪馬壹国研究会」において積み上げている学習によれば、西日本においても、前方後方形の墳丘は珍しくないのである。

とりあえず、出雲地方の弥生時代の遺跡の特徴をなす「四隅突出型墳丘墓」に注目する形で、書籍上であるが、日本海岸を放浪してみた。荒神谷遺跡や加茂岩倉遺跡の南に流れる斐伊川をさかのぼったところにある松本1号墳・3号墳が前方後方墳とされる。

2 近江地方にて

明治14年に14個、昭和37年に10個が発見された大型銅鐸（最大144cm）で知られる大岩山丘陵がある。その大岩山丘陵と平野部に大岩山古墳群と称される8基の古墳がある。最古に位置付けられているのが富庭古墳で、平野部にある。削平され、埋葬主体は不詳であるが、前方後方形をなし、周溝墓とも考えられている。墳丘墓全長は42mある。

湖東を北に上がった天野川流域の近江町には、法勝寺遺跡がある。60基ほどの方形周溝墓群があるなかに、前方後方形がある。全長20.4m、後方部幅12.3m、前方部幅6mあり、周溝は隣り合う方形周溝墓と共有する部分があり、相互に破壊しあっていない。

近江町と野洲町の間あたりに位置する愛知川流域の能登川町には、神郷亀塚古墳と呼ぶ地域最古の前方後方墳がある。埋葬主体は二基の木槨墓である。

そのほかにも、前方後方墳がある。湖北の高月町の古保利丘陵上に全長60mの小松古墳、若狭街道を抑える湖西の安曇川流域、新旭町余呉川流域饗庭丘陵の先端に全長28mの熊野本六号墳がある。

3 富山県にて

日本海側の遺跡を調べてみると、同じ「四隅突出型」と称しても、形態においては地域的特色があることが判った。

富山県 婦負地区の四隅突出型は、突出部分が肥厚している。そして、興味深いことに、弥生時代の墳丘群の中に「前方後方形



大野英子著『王塚・千坊山遺跡群』同成社

墳丘墓」が存在するのである。

富山市の杉谷古墳群は、東北―南西に伸びる山塊の南端部に位置する。10基の古墳で構成されるが、古墳に挟まれて方形周溝墓群が存在する興味深い遺跡である。

四隅突出型墳丘墓1基、前方後方墳1基、方墳7基、円墳1基で構成される。「A」で示される区域に方形周溝墓群がある。

杉谷古墳群から南西方向に約1kmでぶつかる山塊の北端に、王塚古墳（前方後方形）、勅使塚古墳（前方後方形）などが連なる。

4 中野市の前方後方墳

千曲川流域にも前方後方墳は存在する。

中野市の弥生時代の遺跡で第一番に取り上げるべきは、千曲川右岸の栗林遺跡であろうか。大きな集落遺跡である。同じ千曲川右岸で、栗林遺跡の北に接するように存在するのが南大原遺跡である。

南大原遺跡とは、2021年に「鉄製品に、加工途上の痕跡がある」と報告された。つまり、製鉄作業が行われていた可能性のある遺跡である。

栗林遺跡の東方には、安源寺遺跡群があり、前方後方形墳墓が3基発見されている。そのうちの一つは、出土した遺構が部分的であるが、その形がはっきり判る。

さらに、千曲川を下ったところには、青銅器群が発見された柳沢遺跡がある。銅鐸5点と銅戈8点がまとまっていた。銅戈は、九州型と近畿型が混在していた。

5 会津盆地にて―鎮守森古墳と周溝墓

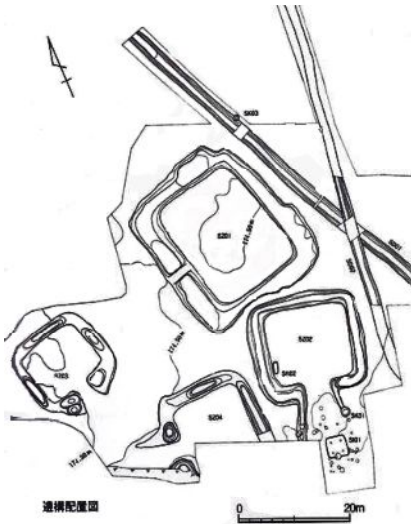
喜多方市と会津若松市の間には挟まれるのが会津坂下町である。掘立柱建物群が広瀬地区などにひろがり、さらに弥生期から古墳期初頭までの墳墓に焦点を当てる。

北西に流れ下る阿賀川が北を、西側は北流する旧宮川（鶴沼川）によって切り取られた河岸段丘上に、亀ヶ森古墳・鎮守森古墳を中心とする遺跡群は存在する。

亀ヶ森古墳と並ぶように作られたのが、鎮守森古墳である。全長55.2mの前方後方墳である。西側に前方部が伸びる長方形であることについて、能登以北の北陸との共通性を認める意見がある。時代は古墳時代前期後葉との判断がある。

亀ヶ森古墳の西、鎮守森古墳の東北に位置するのが、図で示した周溝墓群である。

興味深いことに、図でみられるように、真ん中の「1号方形周溝墓」の周溝が、その右下に接する「2号前方後方周溝墓」



会津坂下町史第4巻資料編Ⅰ考古』

に押されるが、切り取られてはいない。「2号周溝墓」は前方後方形で、周溝のかねあいから、こちらが先に築造され、後から「1号方形周溝墓」が形成されたと考えられる。「3号」も「4号」も前方後方形周溝墓である。3、4号の前方部の未発達に注目すれば、2号前方後方形周溝墓より先に形成されたと考えることができる。

喜多方市の荒屋敷遺跡・館ノ内遺跡からは、四隅突出型墳丘墓とみなされる周溝墓が発見されている。

会津盆地において、四隅突出型墳丘墓と前方後方形墳丘墓が共存することをどう捉えたらいいのか。といつつ、同一遺跡における共存ではないし、日本海側を東漸する状況について「四隅突出型」と「前方後方形」がセットであると解明されているわけではないので、踏み込んだ議論は難しいと思いつつも、前方後円墳一本槍では見ることのできない状況がここに示されている、ということではできないのではないだろうか。

6 福岡平野にて

九州に「前方後方形墳墓」を探した際見つけた一つに、那珂八幡古墳の脇に、複数の方形周溝墓と「前方後方形墳丘墓」が一群の群集墳として調査されたものがあつた。

83次に続く84次の確認調査により、周溝墓（古墳）の規模が明らかになった。後方部西側周溝は未調査であるが、83次北側調査区からその位置がおおよそ推定できる。周溝の下端を基準とした場合の計測値は以下の通りである。墳丘長（東西主軸）18.75m、後方部南北長11.7m、後方部東西長11.7～12.0m、前方部長6.7～7.0m、前方部前端幅7.5m（推定）くびれ部幅5.2mとなる。後方部を11.7m長とした場合、前方部長は7.05mであるが、後方部を8とすると前方部はおおよそ5（正確には4.82）となる。これは那珂八幡古墳（全長約84～85m）の後円部：前方部長比率がおおよそ8：5であることに近い（久住猛雄2002）。

この8：5という設計プランは、纏向型古墳のプランの2：1とは異なることを示している。福岡平野にある前方後円墳であれ前方後方墳であれ、8：5という規格に従い、奈良盆地の規格とは異なるということは、邪馬台国畿内論の「前方後円墳体制」が成立しないということをも示すことになる。

この見解の意義は、考古学会と古代史学会を大きく揺さぶるはずであるが、とりあえずは、弥生時代の墳丘墓を含めて、日本列島全体としてどういう状況にあるのかを見直すべきことを指示しているということであろう。

7 吉野ヶ里遺跡にて

終わりに蛇足ながら、吉野ヶ里遺跡にも、古墳時代初期に位置付けられている「前方後方墳」が4基ある。弥生時代の方形周溝墓群に重ねて築造され、それらを切っていることが読み取れるので、これは「古墳時代」のものとするのであろう。とはいえ、しっかりと「前方後方墳」である。

山上の古代集落 —上ノ山窯跡群の竪穴建物再考— 山田真一

1 はじめに

1987年、ゴルフ場造成に先立ち上ノ山窯跡群の発掘調査が行われた。奈良・平安時代の須恵器窯17基、土師器等焼成坑多数が発掘され、長野県下有数の土器生産遺跡だったことが明らかになった。

この調査では、竪穴建物も26軒発掘された。筆者は、この調査に携わり、竪穴建物を工人たちの工房や住居跡と報告した。また、須恵器でなく土師器等の生産に伴って出現したこと、土器生産だけでなくソバの栽培をはじめとする多様な生産（山野用益活動）が行われていたことなども明らかにしてきた（註1）。

一方で、個々の竪穴建物について十分に検討を深めてこなかったという反省がある。そこで本稿では、上ノ山窯跡群の竪穴建物について改めて整理し紹介することにする（註2）。



図1 竪穴建物の分布

2 発掘された竪穴建物

分布 上ノ山窯跡群は、JR篠ノ井線田沢駅東方の上ノ山（標高841.4m）に連なる山中に位置する。遺構のまとめりと地形から18地区に分けており、竪穴建物は08地区・09地区・11地区・15地区など窯跡に近接する緩斜面の尾根近くと、06地区・18地区など平坦地にまとまって分布している（図1）。

規模と構造 図2に建物の規模を示した。松本盆地の集落址での検討（註3）を参考に、カマドを通る建物の中軸線上の床面の差渡し（主軸方向）の長さを縦軸に、それと直行する方向の床面の差渡し（直交軸方向）を横軸に取っている。

概ね小型1（1軒）、小型2（12軒）、中型（7軒）、大型（6軒）の4群に大別できる。最も小さいのは11B地区1号住居で、床面積はわずかに約2.9㎡、最も大きいのは06地区1号住居で床面積は約34.0㎡を測る。主体は、小型2とした床面積10㎡前後のものである。中型・大型には主軸方向が長い長方形を呈すものも目立つ。

カマドは石を芯にして粘土で構築されている。石は、

山中で得られる砂岩系板石を用いたものが多いが、09地区2号住居や18地区1号住居では河原石が、06地区1号住居では瓦も用いられている。なお、カマドに加えて08地区4号住居と15地区1号住居で炉址を、06

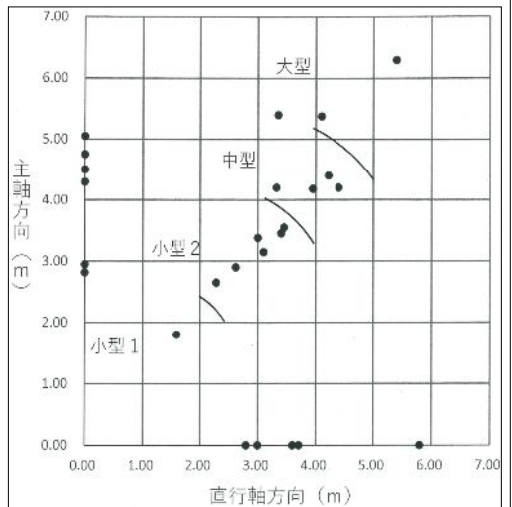


図2 竪穴建物の規模

地区1号住居で鍛冶址を認めた。

断面漏斗状のロクロピットが11B地区3号住居と18地区3号住居で確認された。カマド脇に発見された後者は貯蔵穴と報告しているが、しっかりとした軸穴が検出されており、転用されたものとみる。

5軒の竪穴建物の床面及びピット内から粘土が出土している。このうち06地区1号住居、11A地区2号住居ではカマドと反対側の建物隅にあった。一方、13地区1号住居ではカマド脇だったことから、カマド構築（補修）に用いられた可能性もある。

この他、15地区1号住居、18地区2号住居・3号住居で、床面が一段高くなった施設を認めた。工房に付随する施設（棚状施設）の可能性もある。

出土遺物 竪穴建物からは、須恵器杯・四耳壺・甕、黒色土器杯・皿・椀、灰釉陶器椀・瓶、土師器甕・小型甕などが出土している。このうち、須恵器の杯はほとんどが灰白色軟質のものだった。松本盆地の集落址の土器編年（註4）にあてはめると7期・8期（9世紀中葉から10世紀初頭）に位置づけられる。

土器生産遺跡にも関わらず、06地区1号住居、11A地区1号住居・2号住居・3号住居、11B地区3号住居、18地区4号住居で搬入された灰釉陶器が出土している。この他、珍しい土器として箸（匙）置きとされる耳皿が、06地区1号住居・11A地区2号住居、15地区3号住居、18地区4号住居から出土している。また、土錘が08地区3号住居・4号住居から出土した。犀川での漁撈に用いたものだろうか。鉄製品には鉄鏃、刀子、鎌、糸を紡ぐ紡錘車など土器生産や山野用益活動に用いたであろう道具類がある（註5）。

また、石製品では砥石、さらに06地区1号住居からは帯飾である石銚が出土している。

3 工房か住居か？

表1は、建物に付随する施設、出土遺物等を一覧（大きな建物から小さな建物の順）にしたものである。

地区	遺構名	規模	施設						出土遺物			
			カマド	主柱穴	ロクロピット	粘土	棚状施設	その他	鍛冶	鉄製品	灰釉陶器	その他
06	1号住居	大	○	○	○	○			○	○	○	○
11A	2号住居	(大)	○	○	○	○			○	○	○	○
11A	1号住居	-	○	○	○	○			○	○	○	○
11B	3号住居	大	○	○	○	○			○	○	○	○
15	1号住居	大	○	○	○	○			○	○	○	○
09	2号住居	(大)	○	○	○	○			○	○	○	○
15	2号住居	(中)	○	○	○	○			○	○	○	○
15	3号住居	(中)	○	○	○	○			○	○	○	○
11A	3号住居	中	○	○	○	○			○	○	○	○
18	1号住居	(中)	○	○	○	○			○	○	○	○
08	4号住居	(中)	○	○	○	○			○	○	○	○
08	3号住居	中	○	○	○	○			○	○	○	○
13	1号住居	中	○	○	○	○			○	○	○	○
17	1号住居	(小2)	○	○	○	○			○	○	○	○
15	4号住居	(小2)	○	○	○	○			○	○	○	○
18	4号住居	小2	○	○	○	○			○	○	○	○
18	3号住居	小2	○	○	○	○			○	○	○	○
18	2号住居	小2	○	○	○	○			○	○	○	○
11B	2号住居	小2	○	○	○	○			○	○	○	○
08	1号住居	(小2)	○	○	○	○			○	○	○	○
11B	4号住居	(小2)	○	○	○	○			○	○	○	○
15	5号住居	小2	○	○	○	○			○	○	○	○
10	1号住居	(小2)	○	○	○	○			○	○	○	○
09	1号住居	(小2)	○	○	○	○			○	○	○	○
08	2号住居	小2	○	○	○	○			○	○	○	○
11B	1号住居	小1	○	○	○	○			○	○	○	○

表1 竪穴建物(施設・出土遺物)一覧

土器づくりに欠かせない粘土の出土は中型以上の建物に限られている。11B地区3号住居では、粘土とロクロピットがセットで発見されている。

埼玉県南比企窯跡群では、奈良・平安時代の工人集落の建物を工房型、居住型、半工半住型、選別型などに類型化している(註6)。上ノ山窯跡群においても、粘土やロクロピットが検出された竪穴建物、鍛冶址や炉が検出された竪穴建物などは工房的機能を持っていたと考えられる。中型以上の竪穴建物が多く、カマドの火床の厚さもふまえ半工半住型と考えることができる。主軸がやや長いのは作業空間を確保したためと考えられる。

一方、小型2の竪穴建物の多くは工房的要素が認められず、居住型と考えられる。小型1の11B地区1号住居は居住スペースの確保が難しいほど小さい。カマド小屋とも考えられるが、11地区を見下ろす尾根頂部に発見されており、土器生産の一連の作業過程において何らかの役割を有していたであろう。なお、11A地区で、整理用コンテナ40箱以上に及ぶ黒色土器・土師器・軟質須恵器の欠片を多量に含んだ層が確認されている。斜面上方に位置する焼成坑から排出された不良品と考えているが、11A・B地区の建物で選別されていた可能性がある。

この他、表1からは灰釉陶器や耳皿、さらに転用ではあるが瓦も中型以上に出土が偏っていることがわかる。

4 06地区1号住居について

06地区1号住居は最も大きな建物で、遺跡全体を見渡せる山上に単独で立地している。床面中央に鍛冶址と焼土面を有すことから工房的機能が強いと言えるが、灰釉陶器や瓦、鉄製品、さらに石銚など出土遺物も質量ともに豊富である(図3)。

生産体制の小規模分散化、個別経営化とともに出現した山中における小単位集団の有力者の住居だったとみられる。土器生産を軸としながらも私的な生産(山野用益活動)を拡大し、成長してきた富豪層すなわち沖積地開発の主体者や初期荘園とも有機的な関係を持っていたと考えている。

5 おわりに

上ノ山窯跡群の竪穴建物について、改めて整理し紹介

してきた。限られた紙面ではあるが、安曇野市内で最も標高の高いところに発見された古代集落(竪穴建物)での営み、その特質を垣間見ていただけたなら幸いである。

上ノ山窯跡群の発掘調査から既に35年

が経過した。その後いくつかのレポートを発表してきたが、課題がまだまだたくさんある。調査に携わった者の責として、引き続き一つでも多くの情報を抽出し後世に繋いでいきたいと思う。

<註>

- 1 豊科町東山遺跡調査会・豊科町教育委員会 1999 『筑摩東山-上ノ山・菖蒲平窯跡群発掘調査報告-』 山田真一 2001 「山野の開発と生活環境の変遷」 『生活環境の歴史の変遷』 地方史研究会 雄山閣 山田真一 2010 「甲信越」 『古代窯業の基礎研究-須恵器窯の技術と系譜-』 窯跡研究会 真陽社
- 2 1987年の調査では、上ノ山窯跡群の北東に位置する菖蒲平窯跡群でも竪穴建物1軒を発掘している。また、いずれも遺存状態が悪いため取り上げていないが、11B地区1号土坑をはじめ規模が大きく底面が平坦な土坑の中にも竪穴建物と認められそうなものがある。なお、執筆の過程で、上ノ山窯跡群の竪穴建物を25軒と誤って報告していたことに気づいた。訂正したい。
- 3 望月 映 1990 「古代の竪穴住居址」 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4 総論編』 (財)長野県埋蔵文化財センター
- 4 小平和夫 1990 「古代の土器」 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4 総論編』 (財)長野県埋蔵文化財センター
- 5 永井智教は、鉄製農具の出土を集落の経済的自立に求める一方、「燃料確保や粘土採取の道具、布生産を造瓦に使用するとすれば、逆に窯業に特化した結果」とも解釈している。永井智教 2015 「窯業遺跡と竪穴建物」 『季刊考古学』 第131号 雄山閣
- 6 渡辺 一 1994 「須恵器作りのムラ-工人集落の歴史的な性格」 『古代東国の民衆と社会』 名著出版

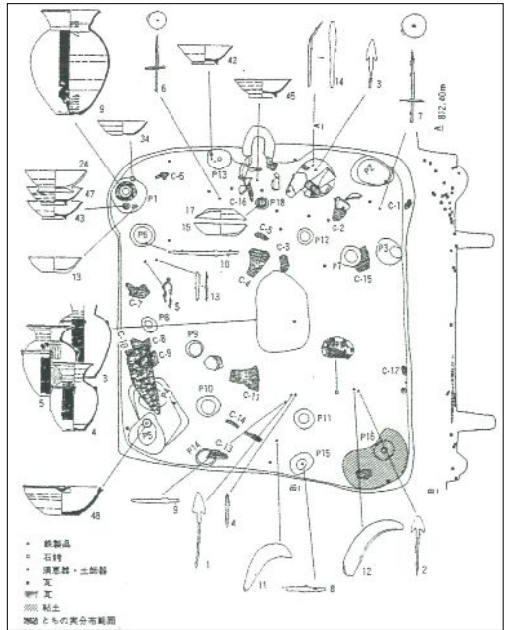


図3 06地区1号住居遺物出土状況報告書

住吉庄の成立に関わる予想

逸見大悟

はじめに

折に触れて、各地の神社で奉斎する御祭神に、『古事記』『日本書紀』(以下、『記紀』と略す)に登場する神々の名が宛がわれるようになったのは、いつごろからであろうか?と考えることがある。私事ながらこんな時、「神様に対して不敬なことを言うな!」と自らを非難するもう一人の自分がある。思想信条の自由が認められている現行憲法下にあっても、神仏に対して、懐疑の念を持つことに気が咎めるのは、筆者だけではなからう。

例えば檜の住吉神社。江戸時代中期に編纂された松本藩の地理誌『信府統記』には「住吉五社大明神」と書かれている(註1)。すでに現在と同じように、五柱の祭神が祀られていた。すなわち表筒男命、中筒男命、底筒男命の住吉三神と、健御名方命及び神功皇后である。

中世の住吉庄の惣社として奉斎されたと考えられているが、果たして住吉庄の成立時に住吉三神は祀られていたのであろうか。住吉庄の歴史を紐解いていくうち、荘園の成立が先か、祭神の勧請が先か、よくわからなくなってきた。

また戦国時代の永禄10年(1567)には、武田氏の家臣と思われるところから文書が発給され、「住吉之宮」の造営のために銭の徴収権が与えられている(註2)。この「住吉之宮」の「住吉」は、住吉庄を指す地名なのか、祭神を対象とした神社の呼び方なのかかわからない。文書の宛所も「梅村之神主」となっており、郷よりも小さな単位の村にいた神主という印象も受ける。神社が中世から存在したことは認められるものの、地域においてどの程度の規模や位置づけを持ったものであったかは、今ひとつ判然としない。

史料がほとんど残らない時代の歴史を解明しようとするのは、幾許かの困難と危険が伴う。だが葦の髄から天井を覗いて見えてくるものもある。住吉庄についても、そんな気がするのである。気がするだけかもしれないが。では住吉庄はどのように成立したのだろうか。結論を予想し、今後の展望について考えてみた。本稿は論証ではない。あくまで今後の研究の予想としてお読みいただければ幸いである。

水にかかわる住吉神社

住吉神社の所在する三郷温・檜の字大原は、黒沢川が末無川として地下に潜った先に位置していた。あたかも氾濫から集落を守るように広大な社叢が広がり、境内には61科205種もの植物がみられるという(註3)。その中には当地より標高の高い山地に自生する植物もみられる。自然流によって運ばれてきた種子であり、黒沢川がここまで流れ来っていた証左である。だからこのような場所に水の神である住吉三神が祀られたという筋書きも、一

理あるように思える。

だが安曇野に祀られた多くの神社は、祭神の如何にかかわらず、利水や治水と大きくかかわっており、住吉の神だから特別に、ということでもあるまい。また『記紀』を読んででもわかるように、住吉三神は、神功皇后のいわゆる三韓征伐を見守った航海の神としての要素が強い(註4)。ではなぜ住吉三神が祀られる「住吉神社」が成立し、また「住吉庄」という名の荘園ができたのか。中世の史料から推測してみたい。

長講堂領のひとつ、住吉庄

「住吉庄」は、文治2年(1186)に初めて史料上に現れる。前年の元暦2年(1185)に壇ノ浦の戦いで平氏が滅亡すると、源頼朝は朝廷に奏請して、平氏の没官領(没収地)などに地頭を設置する許可を得た。このように、全国の荘園で地頭の設置が制度化される中、文治2年に後白河法皇から下された文書が、「乃貢未済之庄々注文」である。年貢を滞納している荘園をリストにして、頼朝に催促を行ってほしいと要請したのである。その中に住吉庄がみえ、野原庄とともに「院御領」すなわち後白河院の荘園とされていた。

しばらく後、住吉庄を含む180ヶ所の荘園が長講堂領として集約される。長講堂とは、後白河法皇の御所だった六条殿の敷地内に建てられた持仏堂である。

建久3年(1192)に法皇が崩御すると、長講堂領は、その寵妃であった高階栄子(丹後局)と、その皇女・観子内親王(宣陽門院)に継承された。この時の院庁下文には興味深い文言がみえる。

「永く大嘗会・造野宮・宇佐勅使・住吉造営・造内裏・造御願寺塔以下の勅院の事、国役ならびに国郡司・甲乙諸人らの妨げを停止し、従二位高階朝臣家をして京中・諸国の領地庄園を知行せしむべき事」(註5)

「従二位高階朝臣家」というのが高階栄子と観子内親王のこと。彼女らへの伝領にあたり、大嘗会をはじめとする朝廷や国司などからの課役の一切をやめさせる、というのである。

一般に、荘園とは貴族や寺社の私領と説明され、国司の収奪を避けるために朝廷の有力者などへ寄進されたものが「寄進地系荘園」と呼ばれる。だが荘園の形態はさまざまであった。高校の日本史の教科書で説明されるような、一円的に領域を包括した荘園もあったが、一定の地域内に散在している田畠などを荘園としているものもみられた。また有力な貴族や寺社に寄進しているからと言って、国司や朝廷への納税やその使者の入部を完全に拒否するような排他的な私領であったかと言えば、必ずしもそうではなかった。例えば「不輸租田」といって租庸調のうちの租を免じられていても、ほかの官物を賦課

された荘園もあった。朝廷や国府との関係性が一様ではなかったことが、荘園に対する理解を難しくしている。

長講堂領の諸荘園にしても、いずれかは大嘗会あるいは宇佐八幡宮への勅使派遣の費用など、国家的な行事の財源に充てられていた荘園のようだ。だから高階朝臣家への相続にあたって、わざわざ上記のような文言を入れ、朝廷や国司に対してほぼ排他的な私領とすることを認める下文が院から出されたのだろう。

住吉庄の成立と滋野氏・西牧氏

さて、この文中に「住吉造営」とあるのに注目したい。これは、現在の大阪市住吉区にある住吉大社の造営である。長講堂領の一部の荘園にこの費用が課せられていた。三郷にあった住吉庄も恐らくはそのひとつではなかったか。だから「住吉庄」という名がつけられたのではなかろうか、と考えるのである。ただし結論に至るまでには、いくつかの論証を経なければならない。

そのひとつは、長講堂領の中で、住吉造営や宇佐勅使、大嘗会などの費用を負担していたほかの荘園があったかどうか。残された史料は少ないが、180ヶ所もあるという荘園のなかで、どの荘園にどの費用が賦課されていたか、一部でも知ることができればよいと思う。これは荘園史の解明にも絡む大きな問題なので、ともすればすでに研究がなされているのかもしれない。

そして、安曇野市やその周辺に住む私たちにとってより重要な問題は、なぜ信濃国の安曇郡に住吉大社の造営費用を負担する荘園が成立したか、ということだろう。考古学でも、況して歴史学でも解明されていない9～12世紀の郷土の歴史に切り込む問題である。

そのためには、滋野氏との関係を確認しなくてはならない。滋野氏は朝廷に仕えていた貴族であったが、平安時代前期に信濃守に任じられ、一部が土着したらしい。その一族は、東信の海野・望月・祢津の三家をはじめとして、信州各地に散らばった。このうちの海野氏は、鎌倉時代に明科や光、田沢などに庶家を分出している。

一方、明科の海野氏より以前に、現在の松本市梓川地域に勢力を張った滋野氏がいた。建仁3年(1203)に、松本市梓川上野の真光寺の木造阿弥陀如来坐像を造立したのも、滋野兼忠の一族である。彼らは西牧氏を名乗り、梓川の河岸段丘上で古幡牧を経営する一方、住吉庄の在地領主として活動したと考えられている。

この河岸段丘とは、八景山から角影、三郷の野沢を経て上長尾まで続く。赤坂の段丘とも呼ばれ、かつて梓川の侵食により形成されたものという。この段丘下の花見から丸田一帯にかけて、「降簾田圃」という古田地帯が広がっていた。稲作に適した耕土が深く、沢水や段丘から流れ出る湧水が豊富な良田であった。この降簾田圃が西牧氏の財政基盤の一端を支えたことだろう。

これと同様に、上長尾の段丘の下にも「城下田圃」という古田が広がっていた。当初は黒沢川の沢水を利用し

たが、のちに長尾堰が引かれて水量補強がなされた(註6)。

またこれらの段丘上にはいくつもの小規模な砦が築かれた。長尾城もそのひとつである。

段丘下の耕土地帯に水田を開き、段丘上に砦を築く手法は、梓川地域においても上長尾においても同じである。

また上長尾を潤していたのは、段丘の上から流れてくる沢水や、梓川地域から引かれた長尾堰であり、その水利権は西牧氏が掌握していたはずである。それらの用水が下長尾や楡へと流れていった点からも、西牧氏が住吉庄の在地領主であったことは肯ける。

以上のことから、滋野氏と住吉大社との関わりが分かれば、当地に住吉庄が成立した経緯もわかるのではないかと思う。平安・鎌倉期の数少ない史料から、そこまで調べるのは困難かもしれないが、ひとまず課題として挙げておく。

おわりに

冒頭で述べたように、これらの考察はまだ予想の段階で足踏みをしている。これまでのコロナ禍と、また筆者の多忙もあり、史料を探しての論証はこれからである。

平安時代における安曇郡南部の開発が、仮に滋野氏の手によるところが大きいとすれば、当会が掲げる「安曇誕生の系譜」も、単線ではなく複線の系譜をたどらなければならない。だがそれもまた楽しいことではないだろうか。

<註>

- (1) 鈴木重武・三井弘篤編述『信府統記』(国書刊行会・1996年)546頁
- (2) 『信濃史料』第13巻180頁
- (3) 『三郷村誌Ⅱ第一巻自然編』(2004年)245頁
- (4) 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注『日本書紀(二)』(岩波書店(岩波文庫)・1994年)156・160頁など
- (5) 『信濃史料』第3巻430頁
- (6) 小穴喜一『土と水から歴史を探る—古代・中世の土地利用を軸として—』(信毎書籍出版センター・1982年)



住吉神社の遠景

**ホームページをリニューアル
安曇野歴史サロン** 平林厚美



安曇誕生の系譜を探る会のホームページ(HP)は、初代会長の金井恂氏が個人的に製作され、費用負担も含めて長きにわたり維持・管理をされてきました。心から厚く御礼を申し上げます。横浜在住の金井氏にとってHPの編集・運営には自ずと限界があり負担も大きいため、本会が運営する必要性からリニューアルしたサイトを製作いたしました。

会の愛称である「安曇野歴史サロン」を冠したHPのホームページ画面には、従来から使用されたロゴに隠れて平瀬城跡から見た安曇野があります。掲載内容は、内外の講師による歴史文化に関する講座(安曇野歴史サロン例会)のお知らせ、年2回発行の会報「安曇人」の掲載、会員による論考集、その他安曇野の文化・歴史を継承する活動を行っている他



団体のホームページにリンクを張っております。

ホームページは未だ不十分な部分がありますが、お許しをいただき、今後皆様のご意見ご提案に可能な範囲で対応をしたいと思います。スマホでも見ることが可能なので、左上のQRコードをスキャンしてご覧ください。

**穂高古墳群の整備協力
B4号古墳** 古川幸男

毎年恒例の「古墳整備」(あえて清掃ではなく整備と書きます)が、昨年度も開催されました。

めくるめく魅惑の穂高古墳群。その中でも天満沢沿いにひっそりと鎮座ましますB-4号墳。安曇野市教育委員会文化課の土屋さんから、「今回は草刈りは止めて土木工事をやりましょう!」とのご提案あり。

最近、古墳周辺の木を伐採したら穴が露わになってしまい、子供が誤って落下したら大変危ないので、天井石



の無い石室内に砂を詰めた土嚢を埋めたいとのこと。「発掘じゃなくて、埋めるって事か!!」ブラボー!!! 素晴らしい!大賛成!!! そんなことやったこと無い。なかなか出来ない体験だ。ここで、悲しいお知らせです。話が盛り上がってきましたが、紙面のスペースが無くなりそうです。この後はざっとご紹介します。

当日は教育委員会の皆様と集まって、土嚢に砂を詰めて手渡しでリレーして石室内に置いて、お茶飲んで、またやって、終わってから同文化課白居さん達の日本神話おもしろ紙芝居を見て帰りました。う〜ん 達成感あるわ〜 また今年もやります。(終わり)

編集後記 丸林一孝

昨年十一月に百瀬会長からお散歩ツアーに誘われました。会長が案内人を務める堀金地域小多田井地区の石仏巡りです。コロナ禍での気分転換に良いかなと思いついて参加してみました。他の参加者や関係者等と共に小多田井公民館からスタートしました。★江戸時代に四国お遍路八十八カ所霊場参りを真似て作られたそうです。当初は八十八体あったそうですが、盗難などもあり現在ではかなり数を減らしているそうです。そのためか、多くは各家の庭に大切に安置されていました。予め許可をいただいていたのでそれぞれの庭に入り見学させてもらいました。お顔は摩擦していたりして良く判らないのですが、石仏にはそれぞれ御名前があり番号も彫られていたそうです。★昔は道端に建てられて道の方を向いていたということなんです。願掛けしながら石仏にお参りして回るのだから体力維持を兼ねた一石二鳥のウォーキングです。この地区が羨ましいと感じました。★しかしこの地区の元庄屋(丸山家)の前での説明では、多田嘉助らが松本藩の増税に反対して貞享義民騒動を起こしたときに荷担しなかったという事です。互いに元武士同士なので意地があったのだろうとは百瀬さんの解説です。義民奉賛講地区役員の私には、楽しかったけれど複雑な思いをした半日でした。